



dec monthly

2024.10.1 vol.469 デックマンスリー



● **Monthly Topic** (マンスリートピック)
第27回日本福祉のまちづくり学会全国大会(札幌)
笑顔で楽しく～食べる・遊ぶ・暮らす～
● **dec Report** (デックレポート)
〈寄稿〉ユニバーサルアクティビティの仕組みづくり

dec Interview >>> 鹿島建設(株) 建築設計本部 品質技術管理統括グループユニバーサルデザイングループ グループリーダー 原 利明 氏

第27回 日本福祉のまちづくり学会 全国大会(札幌)でパラスポーツを 体験してきました!

調査研究部 渡辺 利奈

8月31日に行われたパラスポーツ
チャレンジは、義足ラン(体験義
足)、ゴールボール、車いすバスケ
ット、ウィルチェア・スキズ、シットク
ロスカントリースキー、ボッチャの6
種目のパラスポーツが体験できる
イベント。私はスロープや段差など
を車いすで乗り越えるウィルチェ
ア・スキズに挑戦しました。初め
ての車いすで、階段などの段差を
超えることに最初はとても恐怖を
覚えました。コツさえつかめれば
意外にも小回りができるし、段差
も乗り越えることができました。

続いて、ゴールボールの会場に
足を運ぶと、目を完全に覆い視界
がゼロになるゴーグルを着用し、鈴
のついたボールを相手のゴールに
入れて得点を競うゲームの真っ最
中でした。鈴の音だけを頼りに体全
体を使ってゴールを守るこの競技
は、まだ記憶に新しいパパラリン
ピックでも公式種目となっており、
日本の男子チームが金メダルを獲
得したことで知られています。使用
するボールは1.25kg。バスケット
ボールとほぼ同じ大きさですが、重
さは約2倍です。体でボールを受け



暗闇の中、鈴の音を頼りに体全体を使ってゴールを阻止!



おっかなびっくり段差を超える

止める際には、ストレートにお腹に
当たってしまうとかなりの衝撃を
感じました。百聞は一見に如かず。
福祉を身近に感じながら、貴重な
体験をさせていただきました。

第40回 寒地技術シンポジウム

第40回寒地技術シンポジウムを札幌市(会場:札幌コンベン
ションセンター)で開催いたします。寒地技術に関心を持つ多くの
皆さまのお申込み、ご参加をお待ちしております。
詳しくはdecサイト内ホームページ(<https://www.decnet.or.jp/project/ctc/>)
をご覧ください。



「寒地技術シンポジウム」ウェブサイト

プログラム公開中!
HPをご確認ください

■開催日:2024年11月26日(火)・27日(水)

■会 場:札幌コンベンションセンター
(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)

■内 容:

- ★聴講(無料).....【申込締切】11月14日(木)
- ★報告論文→申込・概要提出.....受付は終了しました
報告論文原稿提出.....【申込締切】10月31日(木)
- ★発表概要集(1冊2,000円[予価])※当日資料代としてお支払いください
- ★懇親会・・・11月26日(火)開催予定(有料)

編集後記 突然ですが、今年の秋の一番の思い出は、何と言っても赤平で開催された「赤平キャンプ
レイク」です。赤平エルム高原リゾートでキャンプを楽しみながら参加できる野外フェスで、
音楽の他に子どもも楽しめるワークショップや屋台があり、会場丸ごとお洒落空間。キャンプでよく見かけるお洒落
な家族連れなどが沢山集っていました。さらに特筆すべきは参加したアーティストと観客との距離が近いこと。推し
との一体感を感じながら、ビール片手に至福の時間を過ごしました。また来年行きたいなあ、と思っています。(R.W)



できるだけ多くの人が空間や環境、製
品、サービスを利用できるよう設計す
るのが「ユニバーサルデザイン」。空港
や病院など公共施設で優れた取り組
みを先導されてきたのが原利明さん
です。「第27回日本福祉のまちづくり
学会全国大会」(8月31日～9月1日)
の来札時にお話をうかがいました。

スーパーゼネコンで活躍されてきま
した。まず、建築設計者を志した理由
についてお聞かせください。

劇場などの設計を手掛ける音響設計
をやりたいと志望大学を選び、建築音
響工学の木村翔先生がおられる日本大
学理工学部に進みました。

2年生のときに、学内の小林美夫先生
の研究室からお誘いがあったコンペの
お手伝いをしたのですが、それが静岡県
立大学の設計でした。その後、コンペで
選定された小林先生の建築設計事務所
でアルバイトを続け、結局、このプロジェ
クトの基本設計から実施設計、竣工まで
足掛け6年間お手伝いして建設過程を
見せていただくことができました。その
なかで音響設計を専攻するより音響、設
備、構造など各分野を取りまとめて一つ
の建築物をつくる意匠設計者を目指す
方が自分には合っていると思うようになり、
小林先生の研究室で修士課程まで
お世話になりました。

修士設計のテーマは新潟港の一画の万
代島再開発地区における国際コンベン
ションセンター。この成果を小林研究室で
指導いただいた伊沢岬先生のご縁で新潟
の地元政財界の方々に披露する機会にも
恵まれました。その後2003年に「朱鷺メッ
セ(新潟コンベンションセンター)」が竣工
するのですが、建設の気運を盛り上げる
のに少しお役に立てたかもしれません。

そういうこともあり、1990年に鹿島建
設に入社後は再開発などのプランニン
グを行うセクションに5年ほど所属しま
した。ただ、この部署は実施設計とは無
縁で、希望を出して設計監理のできる部
署に移らせてもらいました。そこで有名
人のオフィス兼自宅を手掛けたのが初
めての現場体験です。

目の病気に気づかれたのは働き盛り
の頃とのこと。大きな転機を迎えら
れました。

その後東京の本社から名古屋支店に
転勤し、企業の研修保養施設(三重県鈴
鹿市)や大きな講堂を4つも持つ大学
(大阪府吹田市)の校舎など、設計者とし
てとても面白く恵まれた仕事をさせて
もらいました。

その一方で、現場の暗い部分に入ると
夜盲症状で歩きにくくなったり、細かい
図面が見えにくくなったりするようにな
りました。網膜色素変性症の進行による

人の五感から空間デザインを考える
取り組みをしてきました。建築設計者にとって
合理的配慮は本来業務であり、
まずは自分ごととして利用実態を深く理解し、
発想力を発揮することだと思えます。

dec Interview

はら としあき

1964年東京都生まれ。90年日本大学大学院理工学
研究科(建築学専攻)博士前期課程修了後、鹿島建設
(株)入社。一級建築士。設計者として脂が乗り始めたこ
ろに網膜の疾患により視力が落ち、ロービジョンの
当事者として、また建築意匠設計者として、ユニバー
サルデザインに関する業務、調査研究に従事。04～
05年(一財)国土技術研究センター 出向し、06年より
現在の部署に勤務。14年早稲田大学で博士号取得
(人間科学)。18～19年(一社)日本福祉のまちづく
り学会副会長。20年より関東甲信越支部長。共著に
「ユニバーサルデザインの基礎と実践」ほか。趣味は
ロック系のドラム演奏。ときどきライブ出演も。

2024年10月1日発行 発行人 倉内 公嘉

発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL (011) 738-3361 FAX (011) 738-1886 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail dec_int001@decnet.or.jp

もので、ロービジョン外来にも相談しましたが、当時は、今のように社会自体が多様性を認める環境にはありませんでしたので、会社に伝えるのはやはり怖かったですね。

しかし、懐の深い会社で、「時間を与えるから、何が出来るか考えてみなさい」と言われたのです。そこで生活のなかで自分が歩きやすい空間、歩きにくい空間をカメラで撮りため、比較・分析するというのを始めました。そうすると色彩のコントラストが強いか照明が進行方向にひかれていると空間を把握しやすく歩きやすいことなどがわかってきました。

そうした結果を社内の勉強会で報告したところ、当時の設計本部長が「これこそデザインの本質だ」と評価してくれたのです。間もなく本社の設計本部に設けられたコンサルティングセンターにユニバーサルデザインのグループがつけられ、そこで仕事することになりました。20年前ぐらいのことです。

(一財)国土技術研究センターに出向し、(一社)日本福祉のまちづくり学会に参加されるなどユニバーサルデザインの研究者としてキャリアを積んでいかれます。

2004年から2年間(一財)国土技術研究センター(以下JICE)に出向し、ここで国や自治体のユニバーサルデザインやバリアフリー関係の調査に携わりました。おかげで国交省や研究機関などユニバーサルデザイン関連の人脈を広げることができ、大いに勉強することができました。

なかでも中部国際空港(05年開港)のユニバーサルデザインを提案するUD研究会に参加できたことは、その後の取り組みの展開につながりました。UD研究会は障がい当事者団体の関係者や研究者から成っています。そこでロービジョンの人には空間の色彩計画や照明計画がポイントなることを提起したところ、多くの人が注目してくれました。また、車いすユーザーや聞こえない・聞こえにくい人などさまざまな当事者たちの実情を知ること

ができたのも有益でした。

このころの出会いのなかで最も大きいのは秋山哲男先生(東京都立大学教授・当時)です。先生は土木工学の分野からユニバーサルデザインに取り組みされてきた方ですが、私の色彩計画、照明計画の考え方に興味を持ってくださり、その後、新千歳空港国際線や東京国際空港、さらに成田空港のUD検討会に参加できるよう推していただきました。

もう一つの大事な出会いは、経産省の触知図記号の委員会で一緒した早稲田大学の藤本浩志先生。機械工学が専門で乳がんの検診用ロボットを開発された触知覚の専門家です。私はすでに大学施設や眼科病院の仕事で、誘導ブロックを使わずに見えない・見えにくい人を誘導する方法として床材の感触の違いを利用する方法を提案していました。病院では高齢者が点字ブロックにつまずいて危ないということもあったのです。

それで人間の足の裏は床材についてどれぐらい違いがわかるのか、知りたくて藤本先生に相談したところ、先生は自分の研究室で取り組んでくださったのです。その後、私も共同研究の一員として参加し、床材の識別に関する知見を深めることができました。

藤本先生にはたびたび「学位をとらないか」とお声がけをいただいていた。当初は荷が重いとお断りしたのですが、しっかり指導、支援いただけるということで着手しました。足掛け7年かかりましたが、14年に早稲田大学審査学位論文「感触の異なる床仕上げ材による視覚障がい者への歩行空間提示法の評価」で博士(人間科学)を取得することができました。ちょうど審



中部国際空港で提案したユニバーサルデザインの例

査会が50歳の誕生日で、「原博士、おめでとうございます」という藤本先生からの嬉しいメールが届きました。

日本福祉のまちづくり学会では2018年~19年に副会長を、現在は関東甲信越支部長を務められるなど研究活動や学会運営の展開に貢献されてきました。

2011年ごろのことですが、学会のなかに色彩計画や照明計画、音環境などをトータルに研究する委員会をつくりたいと思い、「『身体と空間』特別研究委員会」を発足させました。メンバーには建築計画学、建築環境工学、音響工学や、高齢者・ロービジョンの視覚の研究、この分野に造詣の深い建築設計者など5名の方々をお願いしました。その8年間の研究成果をまとめたのが20年出版の『ユニバーサルデザインの基礎と実践』です。この本の副題にした「ひとの感覚から空間デザインを考える」がまさに私の長年のテーマを表す言葉だと思っています。



著書「ユニバーサルデザインの基礎と実践」(鹿島出版会、2020年)

学会運営については、副会長を務めた際に、希望する人なら誰でも参加できる学会にしようと、学会本部に「参加保障委員会」を提案して発足させました。それまでは「情報保障」として、聞こえない・聞こえにくい人に手話やノートテイクを提供していましたが、さらに対象や支援内容を拡大したのです。例えば、全国大会

では車いすなど移動の不自由な人に対して会場付近に案内介助者を出したり、食事における食物アレルギーへの対応、自閉症や知的障がいなどの人のためのカームダウン、クールダウンスペースの設置も行いました。現在も参加保障委員会の委員長を務めており、こうした取り組みは今回の札幌大会でも実践されています。

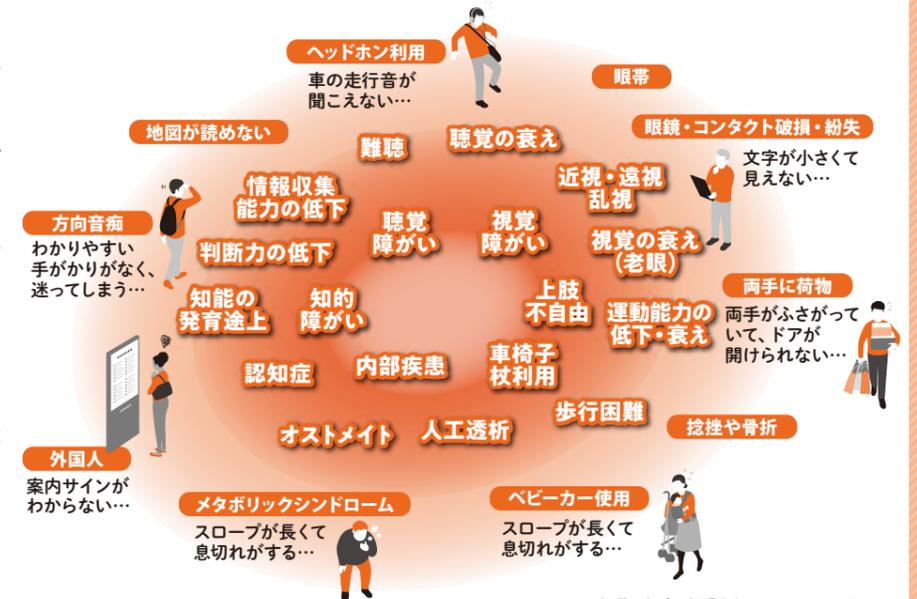
今年4月1日から改正障害者差別解消法の施行により、事業者による障がいのある人への合理的配慮の提供が義務化されました。どのように受け止めておられますか。

「合理的配慮の提供」とは、事業者が負担が過重でない範囲で、障がいのある人の求めに応じて社会的なバリアを取り除くために合理的な対応をすることだとされています。では、建築設計者に問われる合理的配慮とは何なのか。社内の会議でも話したのは、そこで重要になるのは設計者の発想力と顧客に対する説明責任だということです。

設計者は本来、利用者のためにさまざまな合理的配慮をしています。玄関扉の開け方一つとっても雨が降り込まないように、クツが引っかからないように、と考えている。しかし、多くの設計者は障がいのある人と身近に接したことがない。ここに問題があります。車いすの人はどう生活しているのか、目の不自由な人はどう空間認知しているか、知らないで、そこで直面する困りごとを知らない。だから解決策がわからないのです。

私が「デンデン太鼓」と呼んでいる図(右図参照)があります。これはさまざまな障がいを円状に並べ、その外側の同心円状に体調不良や高齢化など多くの人が経験する病気や症状を、さらに外側に日常的な行動や事態などを配置した図です。

例えば「上肢不自由」という障がいの延長線上には「荷物などで両手がふさがっている人」がいて、扉を開けられない不自由は共通しています。ベビーカーを引いていれば段差が面倒。スマホヘッドホンで音楽を聴いていたら電



出典:鹿島建設株式会社ホームページ

気自動車が接近してもわからない、コンタクトを落としたら一時的にロービジョンに。これでわかるように障がいは特別な状態ではなく、すべての人の日常とつながっている。設計者は自分のこととして利用実態を捉え、発想力を働かせることが求められるのです。だから、ガイドラインにあるから誘導ブロックを敷くというのは合理的配慮ではない。利用実態を深く知り、独自の発想力で設計することが合理的配慮だと考えています。

ただ、設計者が要望に応えようと考えたけれど、法的、費用的にできない場合もある。トイレの温水洗浄便座のように以前は高価だったが、今は普及しているというように、技術の進歩で対応の仕方は時代で移り変わるものですが、「今できる最善はこまめでだ」ということを当事者にきちんと説明して理解を求めることも必要だと思います。

海外にもたびたび視察に行かれています。日本の現状との比較で感じておられることは。

パラリンピックが開催都市のバリアフリー化に及ぼす影響は大きいと言われ、特に2012年のロンドン大会はさまざまなレガシーを遺したと評価されています。

私が18年にロンドンに視察に行ったときにもいろいろな気づきがありました。

例えば、飲食店の入口には段差があるけれど、車いすの人がインターフォンで店の人に伝えると、出てきて持ち上げて入れてくれる。これが合理的配慮であって、日本はとかく段差を解消しなければという方向にいってしまう。その違いを感じますね。

JICE出向の最後の海外研修でイタリアのボローニャにヒアリングに出かけた際も「車いすの円滑な移動を促進するためや誘導ブロックを敷くために、この歴史的な都市の石畳をはげ、と言う人はいない」という話を聞きました。移動制約者のためには福祉車両などによる移動支援サービスで対応するというので、考え方は実にはっきりしていました。そこで感じたのは、もしかしたら日本では、自分たちのまちに対する愛着が足りないのではないかと、ということです。

また、空港のユニバーサルデザインに携わってきた立場から思うのは、EU諸国では日本と異なり、移動制約者の移動を助けることが求められるのは空港会社で、これは定時運行性を担保するためだと言われています。空港会社にとって定時運行性はまさに会社の格付けを決定づけるコアコン(コア・コンピタンス:競合他社に勝つための企業の核となる能力)で、そこにユニバーサルデザインがしっかり組み込まれている。それによってこそ、企業のなかに合理的配慮の責務が浸透していくのではないかと感じています。

一般社団法人 日本福祉のまちづくり学会
第27回 日本福祉のまちづくり学会 全国大会(札幌)

大会テーマ

笑顔で楽しく ～食べる・遊ぶ・暮らす～

(一社)日本福祉のまちづくり学会の第27回全国大会が札幌市で開催され、北海道開発技術センターも実行委員会メンバーとして事務局を担当しました。大会の概要を報告します。

[2024年8月30日(金)～9月1日(日) 会場:北海道科学大学および札幌市内 主催:(一社)日本福祉のまちづくり学会]

大会は、台風の影響で参加できない方も多かったが、167名が参加して93編の論文発表と7件の研究討論会が行われ、活発な意見交換が行われました。大会中に行われた、学会賞授賞式では以下の2件が「市民活動賞」として表彰されました。

【市民活動賞】

①ユニバーサル社会の実現を目指した共創プロジェクト

団体名:特定非営利活動法人いねいぶる/T-SIPたつのソーシャルインクルージョンプロジェクト

②地域に根付いた自立生活と多様な「観光地のバリアフリー」活動

団体名:特定非営利活動法人CIL星空
また、市民参加イベントとしてパラスポーツ6種目を体験できる「パラス

見学会 8/30

- ★Aコース:都市型低山体験で、笑顔で楽しく
- ★Bコース:まちなか体験で、笑顔で楽しく

学会・交流会 8/31

- ★研究発表会・支部主催研究討論会・研究討論会
- ★企業展示・学会賞授与式・学会長あいさつ・交流会
- ★市民参加イベント「パラスポーツチャレンジ!」
- ★「ふくまちマルシェ」(6店舗出店)

学会 9/1

- ★研究発表会(特定課題研究を含む)・研究討論会・企業展示

プログラムの詳細は「キッネ」をご覧ください。

スポーツチャレンジ」を開催し、約160名の市民の方々が参加され、楽しみながら「福祉とまちづくり」について考える「きっかけ」になったと思います。同時開催した「ふくまちマルシェ」には札幌市内や北広島市から6つの福祉事業所が出店し、人気のオリジナル雑貨や自然栽培野菜、焼き菓子等

の販売を行っていただきました。いずれのイベントも1日かぎりでしたが、盛況で終了することができました。大会のすべてを紹介できませんが、観光やアクティビティと移動に関わる研究討論会や次頁のdec Reportで支部主催研究討論会と見学会について、寄稿いただいています。

研究討論会から

Universal Maas の社会実装と課題 ～旅行弱者にやさしい移動のための情報環境システム～

- ★趣旨説明:田中直人氏(鳥根大学、人にやさしい情報環境特別研究委員長)
- ★話題提供①:久保雅義氏(芸術文化観光専門職大学)、★話題提供②:大澤信陽氏(全日本空輸株式会社(ANA) Universal Maasプロジェクトリーダー)
- ★意見交換:指定コメンテータ[人にやさしい情報環境特別研究委員会委員]老田智美氏(公立鳥取環境大学)、大森清博氏(兵庫県福祉のまちづくり研究所)、北川博巳氏(近畿大学)、須田裕之氏(筑波技術大学名誉教授)、武者圭氏(Universal Design Network Japan)



久保雅義氏(左)と大澤信陽氏(右)による話題提供

田中委員長の趣旨説明で始まった討論会は、テーマの企画者である久保氏がMaaSの基本的知識と論点を

提起した後、Universal MaaSの社会実装に取り組むANAの大澤氏が経緯や現状について紹介。その後、フロアか

ら秋山哲男氏(中央大学研究開発機構)によるMaaS先進諸国の視察に基づいた情報提供があり、討論へ。大澤



イラスト: © fumi fumi

オリジナルキャラクター作家 佐藤 史也(さとう ふみや)
1994年北海道帯広市で生まれる。2歳の時知的障害を伴う自閉症と診断される。現在は、社会福祉法人北ひろしま福祉会専属アーティストとして活動している。

氏を囲み、指定コメンテータを中心に質疑が行われ、Universal MaaS展開の課題や期待が話し合われました。

★話題提供① MaaS導入は欧州では都市部が重点ですが、日本では地方の社会課題解決を主眼としている点が注目されます。また、MaaSの定義や考え方は立場により微妙な差があり、国交省の捉え方も非常に幅広い。「何がMaaSか」が論議されるゆえんですが、まずは複数の交通機関を交通弱者がスムーズに移動することを目指すUniversal MaaSについてぜひ実践者の取り組みに触れ、今後、テーマを掘り下げたいと思います。

■意見交換

★武者氏 天候異変などによる緊急時の対応はどうか。その場合、広域でのデータ連携が重要だと思うが、その問題点についてご教示を。

★大澤氏 有事の情報はIoT発達で量は増えたが、散らばって見つけにくい問題がある。南海トラフ臨時情報の際に松山市の地図ナビに市の持つ情報を一挙に掲載したが、このようにいかに総合して発信するかに注力しています。

★須田氏 データ収集にはコストがかかり、権利関係もあって民間事業者に提供してもらうのは容易ではないのでは。データの信頼性やセキュリティの担保も大きな課題で、私はデータ管理は公共が責任を持つべきだと思っています。

★大澤氏 公共の管理は大事だと思うが、民間提供のデータも魅力的で、提供すれば利益が得られるとい

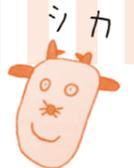
★話題提供② Universal MaaSは「誰もが移動をあきらめない社会へ」を掲げて2018年、ANA社員の自発的提案で始動し、19年度から産官学連携の本格的な実証実験を開始。21年より国交省の支援で社会実装に着手し、対象エリアを拡大中です。産官学の連携パートナーは現在52団体。まず個人で友達になり、そこから組織の連携につながる事が多いです。

私たちは障がい者や高齢者などを「移動躊躇層」と呼び、この方々の快適な移動を目指してきました。そのイメージはUniversal MaaSのサイトのプロモーション動画でご覧いただけます。(https://www.universal-maas.org/) Universal MaaSの意義は①社会的価値、

経済的価値を両輪で創造する、②事業者負担を減らすための業務効率向上、③自治体における地方創生。取り組みのきっかけには私自身の祖母(90代車いすユーザー)に関する体験があり、当事者意識を持って取り組んでいます。具体的なサービスは2つで①交通移動、宿泊、観光サービス利用時の「一括サポート手配」②徒歩移動をサポートする「ユニバーサル地図ナビ」①は旅行者が求めるサポート内容を預かって交通や宿泊などの業者に渡し、旅を組み立てるシステム、②は自治体などのバリアフリーマップを統合し、最短経路を示した上で利用者が経路選択できるよう選択肢を示すしくみです。いずれも道内では札幌や旭川でエリアを広げています。



シマエトカ



シカ

★大森氏 AIで検索エンジンの利用者対応が高度化したように、地図ナビもそうした展開が期待できるのでは。

★大澤氏 AIについては東京大学と研究を進めようと考えており、利用者特性に合った魅力的な検索ができ、楽に経路が出てくるようなものにしていきたいと思っています。

★北川氏 地方の交通問題は深刻で、少ない投資でMaaSをやれるかどうかポイントでは。地域を主役にするMaaSをつくるにはどうしたらいいだろうか。

★大澤氏 事業者にもメリットあるしくみにすることが私たちの狙いです。地域を主役にするようなMaaSを目指す自治体は多いと思うが、私たちの役割はそれをつなぐこと。ある地域の課題解決が他でも役立つという連鎖はあるので、つないでいくことを大事にしたい。 文責:dec



クマケラ

decmonthly 2024.10.1 vol.469

decmonthly 2024.10.1 vol.469

〈寄稿〉同じ時を過ごす、ユニバーサル・アクティビティの仕組み

道尾 淳子氏(北海道科学大学 未来デザイン学部 准教授)

共生社会(symbiotic society)とは、さまざまな人々が分け隔てなく、生きがいを感じながら過ごし、より良く暮らしていくことのできる社会のことです。その前提には、社会人である大人の一人ひとりが「自律性(自ら考えて行動する特性)」と「ポジティブ感情(他者や環境への愛情形成をもたらす喜び、感謝、安らぎ、興味、希望、誇り、愉快、鼓舞、畏敬を何らか持ち、気分が良いと感じる感情)」を持ち合わせ、こども含む多様な人々との集団活動において、先の2つを優先して社会生活を送ることが重要であると考えます。このことは、私自身が、建築・都市計画やデザイン分野をまたぐ実地体験型のフィールドワークやワークショップ企画の実践において得た実感でもあります。

2024年度の晩夏に開催された「日本福祉のまちづくり学会全国大会(札幌)」において、私は、大会テーマである「笑顔で楽しく～食べる・遊ぶ・暮らす～」に見合うような、見学会(エクスカーション)とそれに連動した支部主催研究討論会の企画立案および運営を担当しました。見学会では開催地「札幌」の都市の魅力を日頃から感じている札幌市民の一人として、一つを「都市型低山体験」、もう一つを「まちなか体験」としました。それぞれの企画概要は下記のとおりです。当日は雨雲を逃れ、無事催行となり、大変有意義な体験となりました。

★Aコース----- 都市型低山体験で、笑顔で楽しく

- 開催:2024年8月30日(金)
- コース:円山公園～円山原始林～荒井山～大倉山(施設見学・ランチ)
- ゲスト講師:武田功さん(Team Paramount Adventure代表)

札幌市民にとって行楽の場である円山界隈。世界一雪の降る大都市・札幌は、低山の豊かな自然環境を保全し、野外を楽しむ四季折々の文化を形成してきました。今回は円山公園、国指定天然記念物「円山原始林」、札幌最古のスキージャンプ台「荒井山ジャンツェ」を通り、札幌市街を一望できる大倉山エリアへと向かう、移動距離＝約3.8km(高低差＝約150m)のユニバーサル・ハイキングを体験しました。傾斜のある散策路や歩道では、車いすに牽引式車椅子補助装置「JINRIKI」を装着し、参加者全員が協力して大倉山ジャンプ競技場に向かいました。到着後は、ミュージアムのご厚意で、普段は一般来訪者が入室で

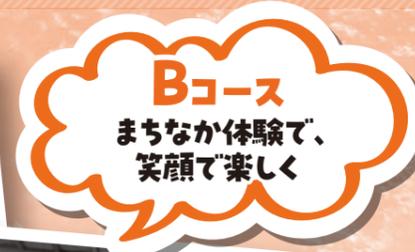
きないプレスルームに入室し、スキージャンプ台をまた違った角度で眺めつつランチを食しました。昼食後は山頂展望台までリフトで乗降し、スキージャンプ選手の滑空の場を間近にしました。眼下には今来た道のりと都市に隣接する山々、都心のJRタワーなど高層ビル群、石狩平野の広がり、端に石狩湾、背後に夕張山地など遠くの間を一望することのできる観光名所です。往路は徒歩、帰路は路線バスと、点と点を結ぶ区間をアクティビティとして工夫し、ガイドを介してまちや自然環境の成り立ちに理解を深め、初めて出会う人と人の交流の時間を楽しむことができました。

★Bコース----- まちなか体験で、笑顔で楽しく

- 開催:2024年8月30日(金)
- コース:狸小路商店街～創成川公園～札幌二条市場～創成東エリア
- ゲスト講師:和田哲さん(街歩き研究者)・後藤輝さん(札幌市まちづくり政策局都市計画部事業推進課再開



写真左:国土交通省バリアフリー化推進功労者大臣表彰を受賞した狸小路の視察での一コマ
写真右:北海寺で記念撮影



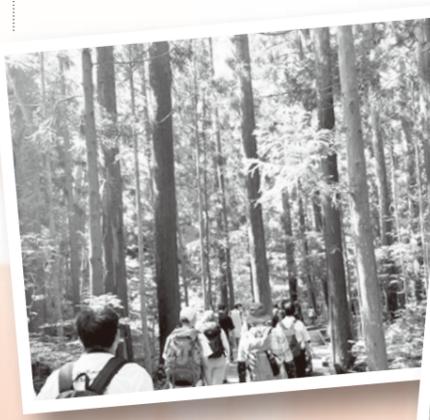
発係長)・渡邊弘さん(moyukSAPORO防災センター)・日向洋喜さん(NPO法人E-LINK代表理事)

札幌のまちなかは再開発が活発です。アーケード、公開空地、公園、空き地、自転車利活用推進、職住近隣のこどもたちの遊び場や放課後の居場所が、現在にかけてどのように改変されているかをテーマに各所を巡りました。「moyukSAPORO」は地下2階～地上3階に商業店舗、4階～6階に都市型水族館、7階に屋上庭園および住宅施設、8階～28階に住戸という複合施設であり、狸小路商店街と路面電車の停車駅、地下鉄・地下街に接続する都市区画の一大改変の舞台です。国土交通省バリアフリー化推進功労者大臣表彰を受賞した狸小路や電停についても解説を受け、加えて、タヌキ＝moyuk(モユク)というアイヌ語由来の施設名や、札幌の都市構造や地名の変遷を興味深く聞きました。また、まちなかの都市公園や歴史ある市場、寺社などの地域資源が、こどもの遊び場としても積極的に活用されている住民連携のあり方について知りました。

★支部主催研究討論会----- 同じ時を過ごす、ユニバーサル・アクティビティの仕組み

- 開催:2024年8月31日(土)
- 話題提供とタイトルゲスト講師:
【Team Paramount Adventureの活動概要】武田功さん(Team Paramount Adventure代表)
【同じとき、同じ場所で、ともに学ぶ。～みらいづくり大学の実践～】久保香苗さん、西理沙さん(医療法人稲生会みらいづくり研究所、(株)TSUKAM)
【色覚多様性】北名由美子さん(北海道カラーユニバーサルデザイン機構理事、(有)キューブプランニング代表)

2つの見学会の実践内容の振り返りを含む、支部主催研究討論会をゲスト3者と行いました。「アクティビティ(activity)」とは「活動」や「活気」を指す用語で、自然をフィールドにアウトドアで開催される体験や遊びに限らず、施設内やインターネット上など、企画者が想定するプログラムに参加者がアクティブな状態であることを指します。人と人がともに過ごすこと、一緒にチャレンジすること。既にある環境をより良く、より楽しく、前向きに捉えて目的を共有すること。本会では、より多くの人が、同じ時に、同じアクティビティを行なうことによって得られる「体験価値(Experience Value)」を優位なものとして、施設やサービス計画側の属人化を解消する社会的な仕組みの実現について議論しました。特に今回は道路や緑地・自然歩道などの都市施設や、その街にとって名所の観光施設を対象として、公共的な問題(＝共生社会という都市住民が達成したい目標との間にあるギャップ)とは具体的に何か、ならびに、課題(＝ギャップを解消するためにやるべきこと)は何かについて意見を出し合いました。各話題提供では、北海道内・札幌市内の実践例を共有いただきました。



写真左:国指定天然記念物の円山原始林 写真右:札幌市街を一望できる荒井山での記念撮影



支部主催研究討論会の様子